

LIVE: RAM ROD 1993.8.11 新宿ロフト

PHOTO BY K.K



いままできいたなかでいちばんよかった。緩ちがいにすぎた。すべての音がザクザクして、ヴォーカレはパワフルで歌詞がよくまきとれた。RAM RODはピカピカの大型の外車って感じ。この前まで、その車はショーウィンドーの中にかざられ、ターテーブルにのってゆっくりまわっているだけだった。ピカピカの、どこからどこまでピカピカの、形の美しい、大型の外車。だけエンジンがかからない……。だから走らない。それが6月24日のロフトのライブでは、その車にエンジンがかからず、ショーウィンドーからゆっくりと外へ走り出した。なめらかに、そして重く。そのゆっくりとした走りはやはり美しかった。そして8月11日のロフト。ピカピカで形の美しい大型の外車は猛スピードで走った。優雅に走った。走りながら鋭く尖った銃弾を機関銃のように撃ちまくった。ピカピカの機関銃。鋭く尖った水晶の銃弾。それは、あまりにも鋭く尖っているので全身、蜂の巣のように銃弾を打ちまわしても、痛みもなければ血も出ない。驚愕で、ただ目をみはっているだけだ。ギターもベースもドラムも思いっきりやっているのだけれど、どのパートもとてもそれだけが目立つことがない。ソロになってもそう。それはどういふことかという、ただやりたいように演奏すること、RAM RODの音楽をつくりだすために演奏するということが、どのパートから入っていても(たとえば、ギターやベースが、いいなあと感じるといふように)RAM RODになるし、どこを走っても(たとえば、いい歌詞だなあと感じた)ソロというように)RAM RODになる。ヴォーカル、ギター、ベース、ドラムのそれぞれのパートに全部意味が感じられる。RAM RODというピカピカの形の美しい大型の外車についていたエンジンはとりわけパワーのあるすごいエンジンだった。

LIVE: REAL 1993.7.11 新宿アンティック

2年前に1回、そして1年前に1回 REALのライブを見たことがある。今回見て思ったのは、REALというバンドは、というよりあのヴォーカレの人は一貫した姿勢を保ちつつけているということだった。姿勢は変わらなくても、深さや寛大さは増していくはずなのだが、この日のライブを見たかぎりでは、なにも変わってはいなかった。曲の説明や、曲と曲のあいだに話すことをきいていて、その「変わらなす」を残念に思った。「アメリカの国家システムが、いいことではないと思う。でもアメリカ製の楽器とか使っているし、日本の国家システムが、いいことではないと思う」、「カンボジアの…云々」といわれると、それまできいていたテンションが下ってしまう。自分を音楽で表現するというより、自分の主張を音楽をやること(ライブのあいだに話をするのも含めて)伝えるというふうには感じられる。だから音楽よりも主張の方が強く感じられる。それもたしかにひとつのはっきりした姿勢である。それを やれとか、やるなとかいふのではなく、あの姿勢だと共感する人がとても限られてしまう。終りの方にやった曲に「俺の幸せは血みじろ」という歌詞があって、演奏はとても説得力があるのに、その血みじろを階級闘争に限定されると、ちがうて思ってしまう。たしかに階級闘争といえるものは、どのように現実の表面が変化して見えても、常に存在する。階級の中で、弱いものは、強いものせいで、いつも血を流している。けれどもそれを全て階級の責任にし、その階級を存在させている一員として自分や他人を責めて、「寄生虫」という歌がそういう内容だったと思う。そこに生きていく展望がひらけるのだろうか。演奏力はすばらしくあるのだから、それはきくもの心の深いところまで届かせる力があるといふことだから、階級闘争の中だけでではなく、「誰の幸せ」だってほんとうは血みじろなのだといふことを感じさせることができるはずなのだ。この日のライブで、この曲をきいて、私は「自分の幸せ」が血みじろだということとヴォーカレからではなく、ギターの音とコーラスの声から感じさせられたから、それと、思想にしても感情にしても、深く自分を表現しようとしたら、他人の思想や感情のキのついたものを基にしては説得力に欠けると思った。マスメディアを通して知ったことを歌にするってよくあることで、それ自体はいいのだけれど、マスメディアのキを通過しているということは、もうすでに他人の思想や感情によっていじられたものであるということ念頭に置いてほしい。

RAM RODのライブ: 新宿ロフト 1/2 (北沢屋根根 1/2 大橋栄蔵UR24(竹道内主役) の中で「日本のシステム」が、

今年の4月3日に川崎クラブ・チッタでドイツのバンド、KREATORのライブがあった。起伏に富んでいて、美しいといえるところも、体の躍るようなところもあって、すばらしくソリッドなライブだった。途中、ヴォーカレの人が「音楽と政治は全く別のもに属していて、決して一緒のものではない。けれども自分たちはbullshitなことがおこっているところから来た。bullshitなidiotたちがbullshitなことやっているとところから」として、後方の大きなスクリーンに赤い大きなX印のついたヒットラーの写真がうつし出された。bullshitなidiotたちというのは、ドイツのネオナチのことをいうのだろう。音楽と政治は全く別のもに属しているということをはっきりと認識したうえで、ネオナチに「ノー」をいうということは、政治的な態度表明ではなく、ドイツという国で現在を生きていて感じられたことの表現なのだ。だからそれはカ強い演奏となってきくものに、まっすぐに伝わってくる。

WORDS: 梅津和時 (「ジャーナル」8月号より)

ジャズを精神性うんぬんで語りたいとは思いません。ことばではなく、モンクもオーネットもミンガスもローランド・カークもアイラもその音だけで感動させてくれます。そして大衆と共にいます。 梅津和時



「精神としてのJAZZ」特集の中で「日本のシステム」が、

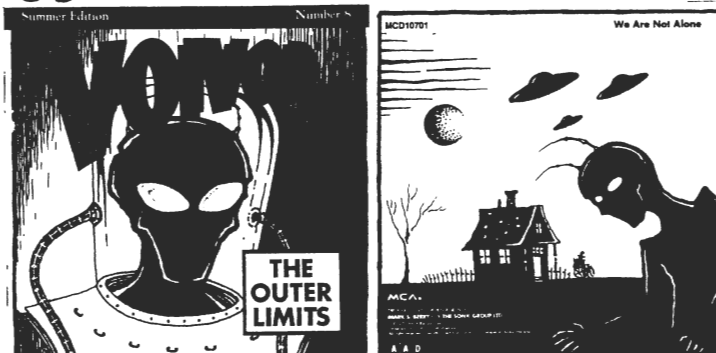
MOVIE: "THE LAST WALTZ" MIDNIGHT SUMMER LIVE

アメリカン・ロックシーンの王道を歩んできた「ザ・バンド」が、16年間の音楽活動にピリオドを打った。仲の良い友人に招かれたパーティーのように、気軽にステージへ現われるビッグ・スターは、ポップ・デイルン、エリック・クラプトン、ニール・ダイアモンド、ドクター・ジョン、ジョニー・ミッチェル、ニール・ヤング、ヴァン・モリソン……と永遠不滅の超大物14大ゲスト・ミュージシャンたち。ひとつのスピリットが終わった解散コンサート《ファイナル・ロック・ナイト》は、'60年代のロックの炎とともに今、燃え上がる。監督は、アメリカ映画界を代表するマーチン・スコセッシ。熱狂と興奮のステージを鮮明にとらえ、観客のリアクションを廃したその映像は、'76ウインター・ランド熱烈体験へと引きこんでいく。そして、彼らのエキサイティングな音を、迫力のライブ感覚で聞かせるリアル・サウンド。劇場が'76年ウインターランドへタイム・スリップする!

●8月30日(月)～9月4日(土) 19:00
ハーダー・ゼイ・カム 77 14:25 19:00
THE HARDER THEY COME
監督: ハリー・ハリス
出演: ザ・バンド、ニール・ヤング、ジョニー・ミッチェル、ドクター・ジョン、エリック・クラプトン、ニール・ダイアモンド、ヴァン・モリソン、ポール・シモーン、ロバート・フィルド、デヴィッド・ボウイ、ジョー・ペック、リチャード・マンデル、スティーヴン・セイヤーズ、スティーヴン・セイヤーズ、スティーヴン・セイヤーズ

●9月6日(月)～9月11日(土) 19:00
ラスト・ワルツ 78 E 16:35
THE LAST WALTZ
監督: マーティン・スコセッシ
出演: ザ・バンド、ニール・ヤング、ジョニー・ミッチェル、ドクター・ジョン、エリック・クラプトン、ニール・ダイアモンド、ヴァン・モリソン、ポール・シモーン、ロバート・フィルド、デヴィッド・ボウイ、ジョー・ペック、リチャード・マンデル、スティーヴン・セイヤーズ、スティーヴン・セイヤーズ、スティーヴン・セイヤーズ

CD: VOI VOD "THE OUTER LIMITS"



CDの内容が聴きたまえがあってすばらしいだけでなく、ドラムのMichel Langevinのイラストレーションが毎回すばらしい。今回は1曲づつ、イラストレーションが描かれているのがうれしい。